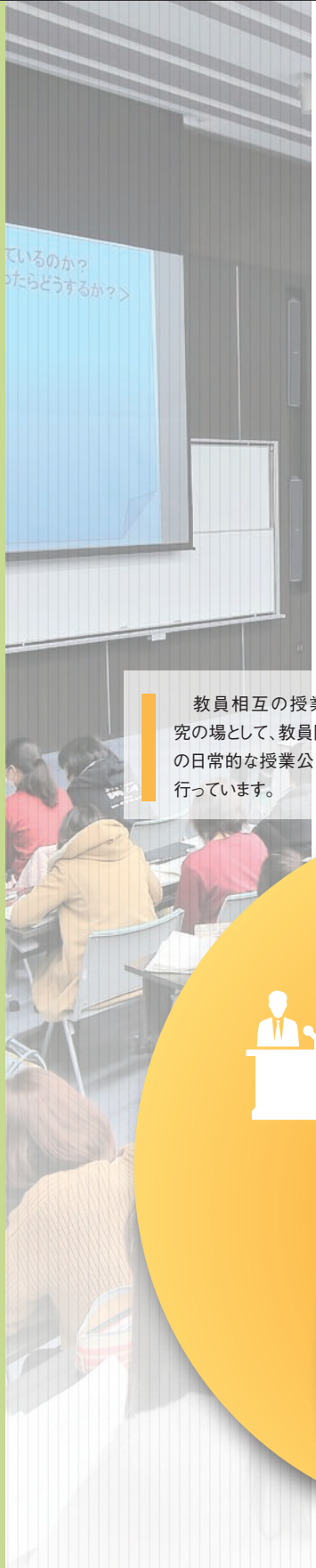
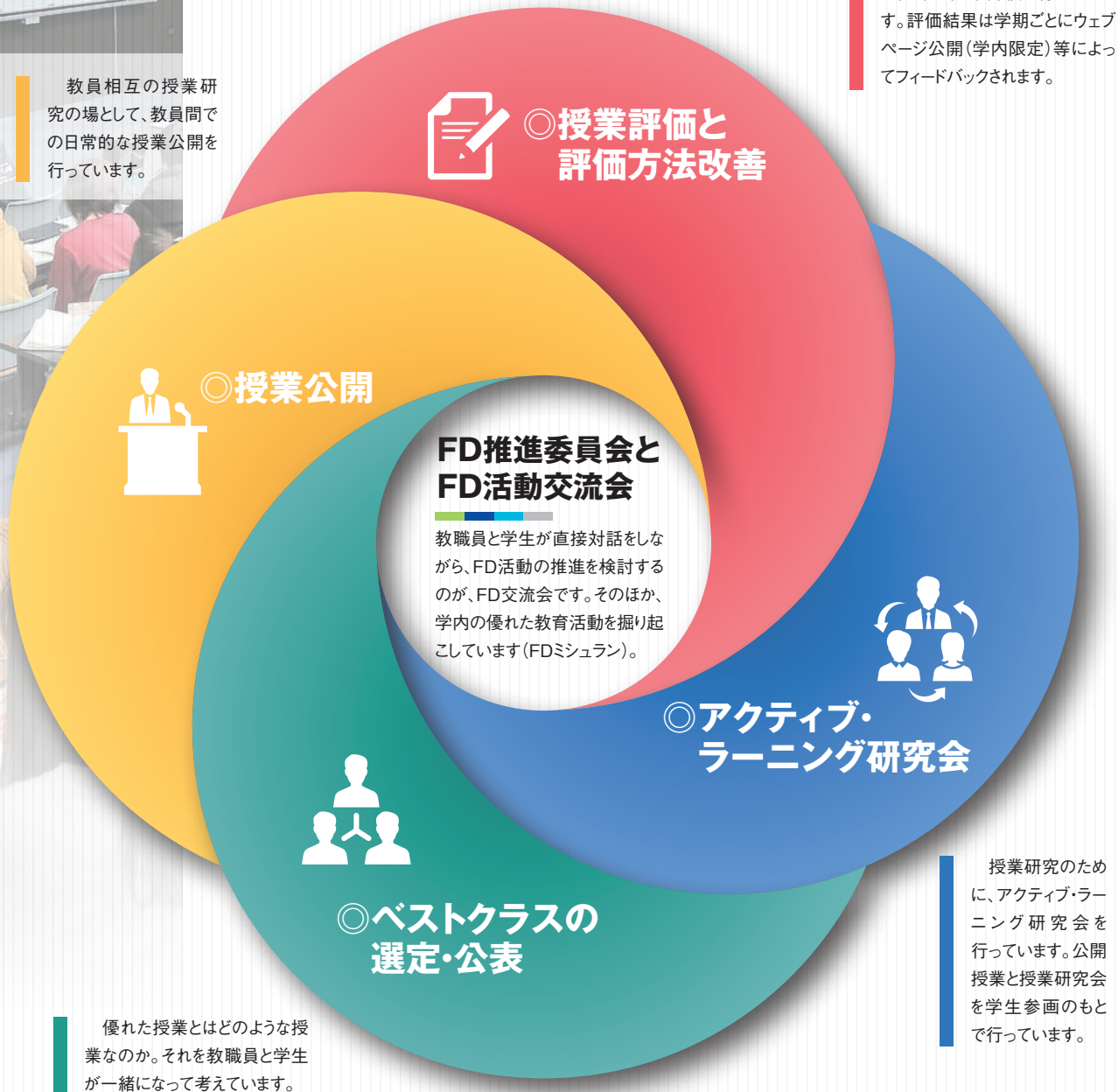
は、優れた授業のモデルや規準を決めて、それに当てはめて選ぶものではありません。授業にはそれぞれ異なった意図やねらいがあるはずです。それを一つの規準で評価することは授業の画一化を招くことにもなりかねません。優れた授業とはどのようなものかという問いを失った瞬間に、優れた授業の多様性が失われる危険性があるのです。そこで賞という概念がベストクラスになじまないのではないかという考えに至ったのです。これが「ベストティーチャー」でも「賞」でもない、「ベストクラス」という概念です。このような考え方で、今年度は平成26年度のベストクラスを選定し、公表しました。



教員相互の授業研究の場として、教員間での日常的な授業公開を行っています。

前期末および後期末に全ての授業で授業評価を行っています。評価結果は学期ごとにウェブページ公開（学内限定）等によってフィードバックされます。



授業研究のために、アクティブ・ラーニング研究会を行っています。公開授業と授業研究会を学生参画のもとで行っています。

優れた授業とはどのような授業なのか。それを教職員と学生が一緒になって考えています。

ベストティーチャーではなく、授業はその参加者全員によってつくられるという考えのもと、ベストクラスを選定し公表します。

【図】兵庫教育大学におけるFD推進活動への取り組み

教育最前線

兵教大のFD活動
―授業は誰のものかを考える―

FDとはファカルティ・ディベロップメントの略で、教育の質保証を目指す取り組みのことです。兵庫教育大学では「教職協働」「学生参画」を基本にFDを進めています。「授業は誰のものか」という問いを学生と教職員が共有・議論し、今年度初めて「ベストティーチャー」でも「賞」でもない、「ベストクラス」を選定することにしました。

学長特別補佐［教育支援（FD）］
FD推進委員会委員長
授業実践開発コース教授
認識形成系教育コース（社会系教育分野）教授
吉水裕也（よしみず ひろや）

FD推進委員会副委員長
生徒指導実践開発コース准教授
山中一英（やまなか かずひで）

現職教員が大学院生として多く学ぶ大学。これは、全国にある教員養成系大学の中でも、兵庫教育大学が持つ大きな特徴でしょう。現職教員は教えることを仕事とし、かつ大学院在籍中は学ぶことをも仕事とする、教えと学びの専門家です。もちろん、ストレート院生も、学部生も、多くは教職を目指して学んでいます。そのような本学におけるFDはどう在るべきか。FD推進委員会では、それを正面から考えて、本学のFDを次のように定義することにしました。

「本学におけるFDとは、本学のミッション及びビジョンを実現するために、大学院・学部におけるカリキュラムや授業についての内容・方法・評価等に関して、教員と事務職員が協働し、学生の参画を得て行う、教育の質保証をめざすあらゆる取組のことである。」

本学のFDの定義には「教職協働」と「学生参画」という二つのポイントが含まれています。このうち「教職協働」は、FDなどを含む高等教育に関する研究者が、今後のFDの方向性として重視するものと一致しています。一方、「学生参画」は、先に述べたように、教員養成系大学としての本学の特徴をよく表しています。この考え方は、私たちの中に「授業は誰のものか」という問いが現れたことと大きく関連しています。FDは教育の質保証に関わる取り組みですから、具体的には授業やカリキュラムの改善が中核になります。その時に、この問いを念頭に置くことが重要だと考えたのです。「学生参画」を具現化するためには、学生と教職員がFDについて公式に議論する場が必要になります。そこで、「学生・教職員FD活動交流会」という組織をつくることにしました。他大学にはない独自性の高い組織です。後述するベストクラスは、この組織における議論の結果生まれたものです。

本学では定義に則り、四つの活動を柱にしてFDを行っています。それは、①学生による授業評価と評価方法の改善、②ベストクラスの選定・公表、③アクティブ・ラーニング研究会の実施、④授業公開です（図を参照）。

その中でも、ベストクラスは他の大学には見られない兵教大独自の考え方です。皆さんご存じの通り、授業は教員の努力だけでは良いものになりません。授業は、教員のみならず学生の高い参加意識があって初めて良くなるのです。この考えをもとに、ベストティーチャーという概念を疑うことにしました。では、優れた授業とはどのような授業なのか。そして、授業は誰のものなのか。それを学生と教職員が一緒になって考えています。ここで、「考えています」と現在進行形にしたのには意味があります。ベストクラス

大学院
（修士）

視覚生理・病理
（昼間クラス）

▼担当教員
障害科学コース
芝田裕一（しばたひろかず）教授

基本データ

科目区分／専門科目 特別支援教育専攻（障害科学コース）／専門分野
履修年次／修士課程1年
受講者数／57人

授業の概要

授業目標は、弱視児・者（ロービジョン）の多様な見え方等に関して演習を主体として考察・検討し、弱視児・者指導の基礎を理解することである。視覚器の構造、眼の機能、視覚検査、視機能異常、眼疾患等、視覚障害につながる視覚の生理・病理の基礎について視覚障害、および視覚障害児・者に関する事項を踏まえて学習する。

学びのポイント

◎専門用語が多く理解が困難な生理学・医学分野であることを考慮し、資料は厳選して配付され、初心者でも理解しやすいよう、平易な言葉で説明されている。学生による授業評価においても、配付資料と説明の仕方に関する受講者の評価は非常に高かった。

◎受講者が当事者意識を持って理解を深められるよう、疑似障害体験演習が取り入れられている。インタビューなどからも、体験を通した学びの有効性が受講者にしっかりと伝わっていることがうかがえる。

◎担当教員は、受講者自身が気付きを持てるよう、授業中にも日常生活での具体的な内容を意図的に提供するよう心掛けている。

◎授業の意図を具現化するために、徹底した学習者理解と細やかなフィードバックにより着実に授業の質が高められている。そして、担当教員と受講者の両方によって、気付きや学びを大切にした学習の場がつくられている。

受講生の声

「視覚生理・病理」は、視覚障害の基礎知識の習得にとどまらず、受講者が視覚障害児・者と適切に関われるようになることを目指す授業でした。ほとんどの受講者がそれらの知識があまりない中で、授業はさまざまに工夫され、とても分かりやすかったです。例えば、専門用語が多くありましたが、テキストのほかに補足資料が配付されました。そして、分からないところがあればいつでも質問をしていいと伝えてもらっていたので、とても学びやすい環境でした。

また、視覚障害児・者のことをより理解できるように、アイマスクを付けて白杖を使用する疑似体験や、担当教員の実際のエピソードなど、講義だけではイメージしにくかったことを具体的に経験したり聞いたりすることで学びが深まったように感じます。

授業を受講してからは、「道が明るければ見えやすいのに」「階段のコントラストがあれば良いのに」など、自分自身の生活に視覚障害児・者のことを置き換えて考えることが増えました。

山口裕子（やまぐちゆうこ）さん
修士課程
障害科学コース2年

大学院
（専門職）

教職員職能開発と研修プログラムの開発
（昼間クラス）

▼担当教員
学校経営コース
浅野良一（あさのりょういち）教授（右）
大野裕己（おおのやすき）准教授

基本データ

科目区分／専門科目（学校経営コース）
履修年次／専門職学位課程1年
受講者数／21人

授業の概要

教職員の育成に向けた各種の取り組みを組織マネジメントや人事管理の視点で整理し、体系的な職能成長のシステムの確立に必要な力量形成を目指す。教職員の職能開発を、学校内での育成と、一定期間職務を離れて専ら行う研修に整理し、前者に対して効果的な活動やシステムの設計・運用、後者に関して教育委員会などでの研修プログラムの企画・立案、実施、評価・改善について扱う。

学びのポイント

◎授業構造や目標を緻密に作成し、学生の評価に加え教員の自己評価により授業改善に努めている。また、理論と実践の結び付きが意識されているため、理論を現実に結び付けるためにグループ演習などの実践を取り入れ、学生に自分なりの理論化を促す工夫をしている。さらに、リフレクションシートに基づいた参考資料を配るなど、分かりやすく役立つ、その後の学修のきっかけとなる授業づくりをしている。

◎目的意識がはっきりしており、授業外でも講義に関連したフィールドワークに行くなど、受講者の参画度も高い。

◎実際に教員の研修プログラムを開発するグループ演習や、地方自治体の教員評価育成システムを改善する演習をすることで実践力がつく。

◎資料が豊富で具体的なデータや情報等が惜しみなく提供される。

受講生の声

本授業は、まさに「ディープ・アクティブラーニング」そのものです。まず、基礎知識としての理論を学び、その後4～6人のグループに分かれて課題に取り組みます。例えば、教員研修プログラム開発では、「小学校での初任者1ヶ月指導プラン」や「教育センターが実施する高校2年目教員への悉皆研修」などの課題をグループで検討します。院生の対話の中で、アイデアや新たな視点が生まれ、自分の経験や知識を超えた、工夫にあふれた研修プログラムが完成します。結果は必ず、パワーポイントを使ったプレゼンテーション等により全体での共有化が図られ、また、毎時の「授業のふりかえり」でも他者の省察や学びを共有できます。

授業では実践的で豊富な先進事例が示されますが、それらは先生方が研修や指導で実際に関与した際に入手されたものが多く、興味関心を持った学生がその教育委員会や学校を自主的に訪問するなど、その後の学生の行動化に結び付いていたこともこの授業の特徴です。

宮本美枝子（みやもとみえこ）さん
専門職学位課程
学校経営コース2年

ベストクラス選定までの道のり

優れた授業は、教員だけではなく参加する全ての構成員の高い意識があって初めて成立する。そして、優れた授業にも多様性がある。平成25年度からベストクラスという概念の構築に向けて取り組む中で、これら二つのことが整理されてきました。

2年がかりで検討してきたものを、今回初めてかたちにすることになります。本学のFDの定義に則って、学生・教職員FD活動交流会（教職協働、学生参画）が選定作業に当たりました。その結果、左の表のように12の授業科目を平成26年度ベストクラスに選定しています。

選定に当たって、学生による授業評価の自由記述を参考にしています。自由記述のうち肯定的で具体的な記述を吟味し、候補を選びました。候補になった授業の担当教員と受講生にインタビューして、授業のねらいの共有度や授業での工夫点等を伺い、それに基づいて選定理由書を作成しました。選定理由書の書きぶりはおのおの異なっています。それは前述の通り、あらかじめ規準を設定していないからです。なお、学生・教職員FD活動交流会での議論の記録は、全て文字にして本学ホームページに学内限定で公開しています。

ベストクラスは、優れた授業科目の共有を目的としています。それぞれの授業科目の持ち味などを共有していただければ幸いです。

【表】平成26年度ベストクラス選定結果一覧

課程	授業科目名	履修年次	科目区分
学部	社会の中の言語文化	1	教養科目群 社会課題探究科目
	美術科教育法Ⅰ	3	専修専門科目群 専門教育科目（芸術系コース）
	生徒指導論（進路指導を含む。）	3	教職キャリア科目群 教職支援科目
	社会科教育法Ⅲ	2、3	専修専門科目群 専門教育科目（社会系コース）
	体育・スポーツ文化論Ⅱ	4	専修専門科目群 専門教育科目（生活・健康系コース）
	社会科教育法Ⅳ	2、3	専修専門科目群 専門教育科目（社会系コース）
大学院（修士課程）	視覚生理・病理（昼間クラス）	1	専門科目 特別支援教育専攻（障害科学コース）／専門分野
	投映法演習（昼間・夜間クラス）	1	専門科目 人間発達教育専攻（臨床心理学コース）／専門分野
	英語教育コミュニケーション論（昼間クラス）	1	専門科目 教育内容・方法開発専攻（文化表現系教育コース、言語系教育分野）／教科教育分野
大学院（専門職学位課程）	特色あるカリキュラムづくりの理論と実際A（昼間クラス）	1	共通基礎科目
	教職員職能開発と研修プログラムの開発（昼間クラス）	1	専門科目（学校経営コース）
	開かれた学校づくりの事例と実践演習（昼間クラス）	2	専門科目（学校経営コース）

学部

生徒指導論（進路指導を含む。）

▼担当教員
生徒指導実践開発コース
新井肇（あらいはじめ）教授（右）
古川雅文（こがわまさふみ）教授

基本データ

科目区分／教職キャリア科目群
教職支援科目
履修年次／学部3年
受講者数／171人

授業の概要

学校における生徒指導・進路指導の諸課題を総合的に理解するとともに、ガイダンス、カウンセリングなど実践に役立てるための代表的な指導方法の理論と技法について学習する。生徒指導については、基礎的な理論や方法を先行研究や実践事例の分析を通じて理解することを目標とする。一方、キャリア教育については、その目的、内容、方法の基礎的理解を目標とする。

学びのポイント

◎2回目の授業で、「あなたが教員になったら私語をなくすためにどのように指導するか」という課題を取り上げ、教員の立場から考える機会を設けることで私語に対する予防的指導を行っている。

◎事例検討を多く組み込んでいることに加えて、講義場面においても一方的な知識の伝達ではなく、学生に問い掛け、考えたり話し合ったりする〝活動〟を多く組み込むことで、自覚的に授業に参加させるように促している。

◎カウンセリング的な姿勢に基づく学生とのコミュニケーションが授業の雰囲気を良くしている。

◎現場経験や教育行政との関わりの中で見聞きした、公式文書にはほとんど出てこない〝裏話〟が学生に喜ばれている。

◎多くの学生が抱く「自らの考えを表出したい」「他の学生とシェアしたい」という欲求をうまく満たすような授業展開となっている。

受講生の声

生徒指導に対して多くの人が抱く「怖い先生」「怒られる」などのイメージが、この授業で大きく変わりました。約170人が受講する大規模な授業ですが、教員が一方的に講義するのではなく、学生が主体的に考え、話し合う機会が多くあります。事例検討では、教員が学生の意見に真摯に耳を傾け、たくさんコミュニケーションを取ってくださったことが印象に残っています。子どもたちのいじめ、自殺、暴力行為など、報道のたびに胸が痛むような事例に対し、「私が教員ならどうするだろう」「どうするべきだろう」と考えを巡らせることが、生徒指導の重要性を再認識することにつながりました。

また、資料は学生目線で作られており、とても分かりやすかったです。受講したのは実習経験の少ない3年時でしたが、具体的なデータが示され、視覚的に分かりやすい図表が多く取り入れられていたので、教育現場の現状をイメージしながら受講できました。それらの資料は受講後の今も、教員採用試験の勉強や教育実習の際などに活用しています。

横山（よこやま） 郁（いく）さん
学校教育学部
学校教育系コース4年